

中部大学大学院国際人間学研究科博士論文

源氏物語の研究

―「をこ」を中心に―

岡本美和子

目次

序		一
第一章 「をこがまし」と「をこなり」――自省する過程		八
はじめに		二
一 『源氏物語』にみる「をこがまし」と「をこなり」		
1 夕顔巻と空蟬巻の用例		
2 紅葉賀巻と帚木巻の用例		
3 夕霧巻の用例		
4 宇治十帖の用例		
二 「をこ」系の語の系譜		二五
1 物語において		
2 日記において		
おわりに		三五
第二章 「をこなり」と「をこがまし」――意味用法の違い		四七
はじめに		
一 空蟬巻から藤裏葉巻までの用例		四八
二 光源氏晩年の用例		五一
三 宇治十帖 薫の用例		五三
四 「をこなり」の非自省の用例		五五
1 会話の「をこなり」		
2 地の文の「をこなり」		
3 草子地の「をこなり」		
おわりに		五六
第三章 「をこがまし」――接尾語「がまし」を中心に		五九
はじめに		
一 接尾語「がまし」		六〇
1 「がまし」のつく語彙		
2 「がまし」の意味		
3 「がまし」と上接語		
4 「がまし」の表現効果		
二 『源氏物語』の会話にみる「をこがまし」		六七

三 「をこがましげなり」にもふれて おわりに	七三 七三
---------------------------	----------

第四章 「をこつる」考

はじめに	八一
一 「をこつりとゝむ」か「をこつりとらむ」か	八一
1 諸本の本文の異同	
2 同時代の用例	
二 「をこつる」の系譜と用例	八三
1 字書	
2 調査対象作品と用例数	
3 用例と分析	
おわりに	九〇

第五章 夕霧卷の「をこつりとらむ」の考察

はじめに	九四
一 『源氏物語』の「こしらふ」「なだむ」「あざむく」と「をこつる」	九五
1 「こしらふ」	
2 「なだむ」	
3 「あざむく」	
二 「をこ」系の語の語構成と「をこつる」	一〇三
三 注釈史関連にみる夕霧卷の「をこつる」	一〇六
1 「をこつる」の注釈史	
2 『賀茂保憲女集』序文にみる「をこつりさを」	
おわりに	一一五

第六章 末摘花にみる「をこ」―「正身」・「きよら」を手がかりに

はじめに	一二六
一 「正身」を中心に	一二七
1 「正身」とされる末摘花	
2 「正身」と「みづから」	
二 「きよら」を中心に	一三一
1 「きよら」をまとう正身	
2 離れていく「きよら」	
おわりに―はぎとられる「きよら」	一三三

第七章 末摘花にみる〈をこ〉―「紅」・「べに」を手がかりに

はじめに 一三七

一 紫の君の「くれなゐ」―桜の細長の意味 一三七

1 桜の細長―紫の君

2 紫の君はなぜ「無紋」か

3 紫の君の「無紋」の意味

二 末摘花の「べに」 一四一

三 「紅」を中心に―梅の立枝 一四二

1 梅花と紫の君

2 「立枝」と紫の君

3 「あかはな」と光源氏

おわりに―末摘花にみる〈をこ〉 一四六

第八章 「人笑はれ」と「人笑へ」―『源氏物語』において

はじめに 一五一

一 「人笑はれ」と「人笑へ」―紅葉賀巻から朝顔巻まで 一五四

1 藤壺の「人笑はれ」と「人笑へ」

2 六条御息所・朧月夜君・明石君の「人笑へ」

3 光源氏の「人笑はれ」と「人笑へ」

二 「人笑へ」―真木柱巻と若菜上巻 一六二

1 鬚黒大将の北の方の「人笑へ」

2 紫の上の「人笑へ」―「をこがまし」にもふれて

三 「人笑はれ」と「人笑へ」―宇治十帖において 一六八

1 薫の「人笑へ」

2 大君の「人笑へ」―「をこがまし」にもふれて

3 浮舟の「人笑へ」と「人笑はれ」

おわりに 一七一

用例分析一覧表

1 「をこ」系の語 用例分析一覧表

2 「人笑はれ」と「人笑へ」 用例分析一覧表

発表履歴（原題及び発表・掲載誌）